



ぼっちお姉さんと
かわいいショタ君

ただの友達ではいけない…

茸山屋

私の
名前は黒崎真希
ハタチの
大学2年生です

いわゆるほつちと
呼ばれるような
キャンパスライフを
送っています…

元タシマイで
引つ込み愚案な
性格ではあつたの
ですが

今まで田舎で
慣れ親しんだ人々と
しが触れ合つて
こなかつた私は

新たな人間関係を
築く力を完全に
失つていたことを
都会に出てきて
気づいたのでした…

!?

動物も寄りつ
かない始末…

人に怖がられ
るのは勿論
ですし

おまけに私は
無駄に背が高く
(175cm)
加えてこの鋭い
目付き……

キョロ

あ…

はっっっ
びびり

おぞ

フヤ





田舎に
帰りたい…

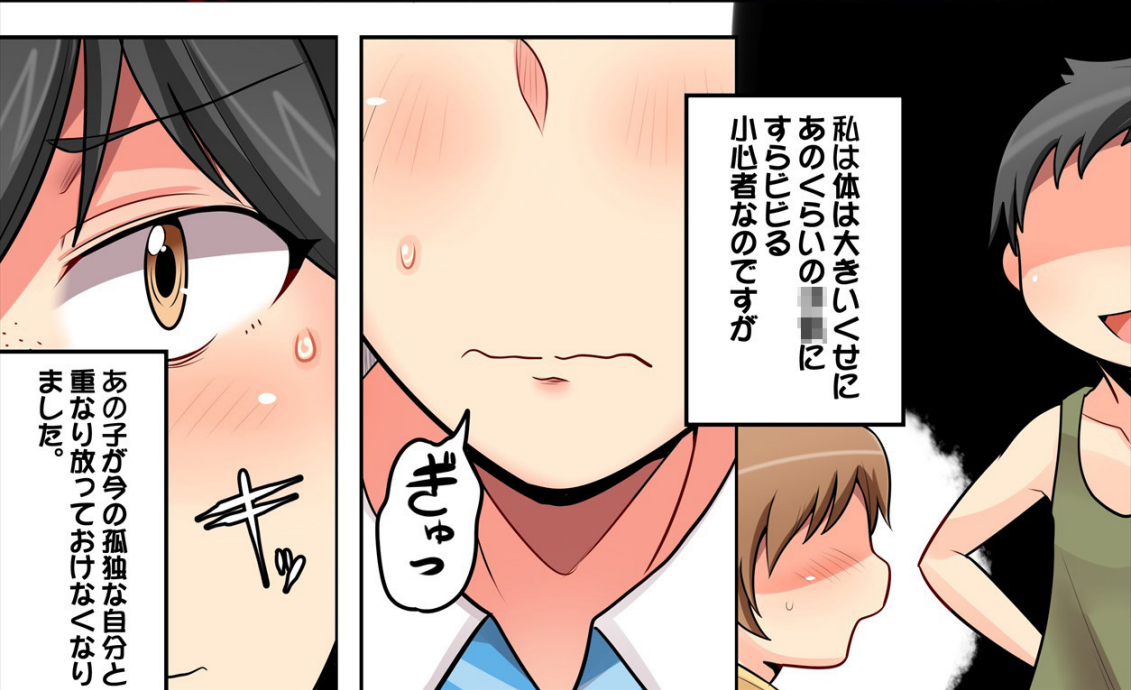
いつしか私は人と
関わろうとすること
も諦め、一年以上
孤独な生活を送って
いました

そんなある日大学
近くの公園で時間
を潰している
と何やら騒がしい
声が…

?



どうやら一人の「転校生」と
呼ばれている一際小さな
男の子が数人の男の子達に
いじめられているようでした

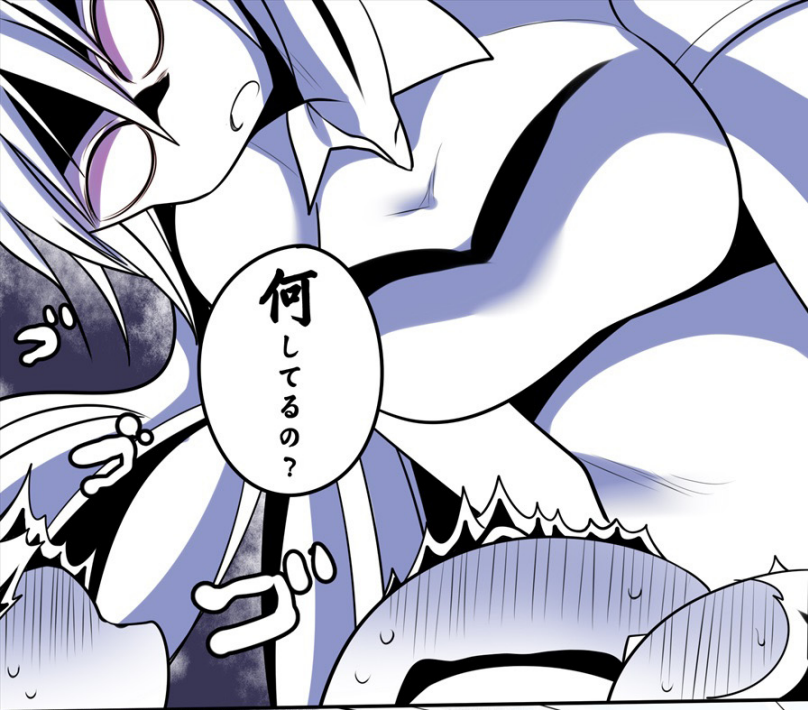


私は体は大きくせど
あのくらいのに
すらじじり
小心者なのですが

ぎゅっ

あの子が今の孤独な自分と
重なり放っておけなくなり
ました。

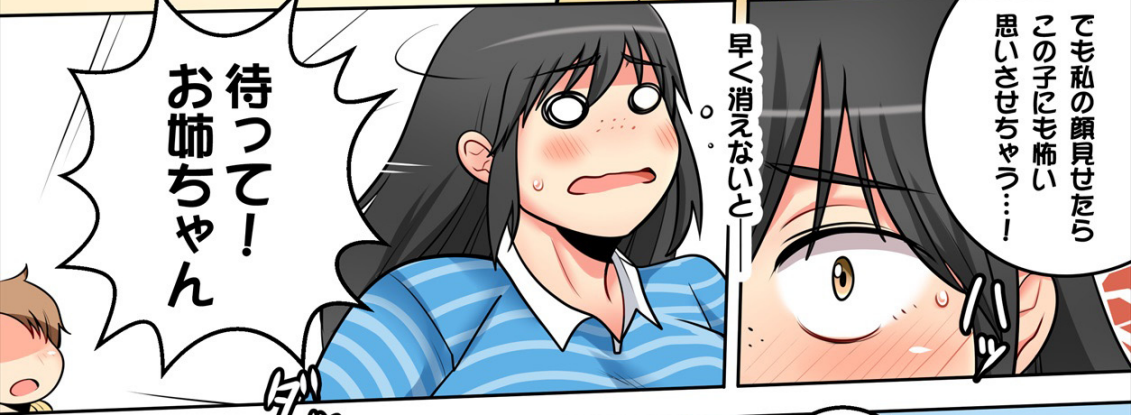
✕





んきゅー！

何この子
超かわいい！



待って！
お姉ちゃん

早く消えないと

でも私の顔見せたら
この子にも怖い
思いさせちゃう……！



ありがとう……

私はこの子と
公園のベンチで
少しお話をすること
になりました

彼の名前は幸太君という
そうです。

幸太くんはお父さんの
都合で転校してきたばかりで、
背が低く顔も可愛い
ことからさっきの男の子
達からけなされたこと
からかわれたのが原因で
ケンカになったそうです。

友達はまだいなくて
ご両親も仕事で遅く
家でモ一人だとか…

あまりにも似た状況なの
で私は恥を忍んで
彼にあることを申し出ま
した

ねえ幸太君…

私とで
良かったら…

友達になって
くれる……？

うんっ！
僕もお姉ちゃんと
友達になりたいっ！

こうして私に都会に
来て初めてのの
かわいい友達が
できたのでした

きゅん

あれから幸太くんは時々学校の帰りに私のアパートに遊びに来ます。
私みたいな人相の悪い女が小さい男の子を部屋に連れ込んでると怪しいかも
しれませんが私は彼のことをかわいいとは思っても恋愛の対象とは
思っていないかつたし、することは一緒にごはんを食べたり

ゲームをして遊んだりと普通の過ごし方……。

そのはずだったのでありますが……。



ある日何かのハズみで幸太くんが私の胸に触れてしまったのでした。

さっしゅん



「いぬをわす……」

あせ

あせ

私は気にしてはいないのですが幸太くんはなんだか
今までにならくら元気なくなっていました。



「私全然気にしてないし……辛太くんが触りたければ
もっと触ってもいいよ……?」

沈黙に耐えられなくなり慌てた私は
意味不明な取り繕い方をしてしまいました。
すると辛太くんは少し顔を上げて
「触っても怒らないの……?」と聞いてきました。

幸太くんはどしどしやうエッチなことは悪くはないけど
強く思っているようになので

「怒らないよ……私達、友達だもん！」
と言ってあげました。

友達になってくれた幸太くんだし

ちよつと触らせてあげていいから……



幸太くんは恐る恐る私の胸を触れました。
私も実は男の子に胸を触られるのは初めてで
内心とってもドキドキです。

「はい……やわらかい……」

あまりにも夢中な幸太くんに私も
サービスしたくなってきて……

「幸太くんおっぱい見たい……？」

「えっ……」

ドキ

ドキ

むに

ぷに

「ほり……」

私は上をめくって胸を見せました。

「わっ……ママより大きい……」

「これの下も見たい……？」

「うっ……うん……」

これ以上は幸太くんの
教育上良くないのかも

しれないけど……。

……で止めたりかわいそうだもん。

グッ

ブルッ

たぶ

「はら……」

「すいん…おっぱい…」

お姉ちゃんのおっぱい…」

顔を赤くしながらも私の胸を

凝視する幸太くん

その視線が余りにも熱くて

私も恥ずかしく

なっちゃう……

ぽんぽん



視線に恥ずかしくなった私は抱き寄せて幸太くんの顔をおっぱいで挟んでしまいました。

「ふん……っお姉ちゃんのおっぱい」

おっぱい

おっぱい

「……お姉ちゃんのおっぱい……おっぱい……おっぱい……おっぱい……おっぱい……」





私の胸に甘える幸太くんはとてもかわいくて初めて胸が大きくてよかったなと思いました。

「幸太くん、他にお姉ちゃんとしたらどうあるっ？」

かわいい幸太君のためにもっと何かしてあげたいと思いついてみました。

「んっ……」

「んっ」

「お姉ちゃん……」

幸太くんは少し潤んだ目で私に聞いてきました。

「っ、っん……」



「幸太くん……」

「お姉ちゃん……こっ……これはね……」

「たまに大きくなっちゃうんだけど……」

「今日はなんかいつもと違って戻らなくて……」

「……」

「じわ……」

「ピキ」

「ピキ」

「カアアア」

「私のせいで勃起しちゃうったんだよね……じゃあ私がなんとかしなうと……」

「幸太くん……」

「お姉ちゃん……こっ……これはね……」

「たまに大きくなっちゃうんだけど……」

「今日はなんかいつもと違って戻らなくて……」

ぽんぽん……

じわ……

ピキ

ピキ

カアアア

私のせいで勃起しちゃったんだよね……じゃあ私がなんとかしないと……!!

続きは製品版で!